
ネギま！転生物 え？転生の意味が違うって？

クロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！転生物 え？転生の意味が違うつて？

【Nコード】

N 8 6 9 1 P

【作者名】

クロ

【あらすじ】

ネギま！の世界にオリジナル主人公がやってきた！原作破壊上等！ハーレム上等！
そんな欲望に忠実に書いた作品です。拙い文ですが最後まで読んでいけたら幸いです。

プロローグ

とある時代のとある国のとある村

特に特産物も無ければ観光にくるような場所も無い本当に普通の村目立ったものと言えば、丘の上に立つその村周辺を収治める領主の屋敷があるくらい

村の殆どの人が毎日を農作業で過ごしその一生を終える。

そんな村に少年は産まれた。

畑仕事をするのは大変だしお腹一杯食べれることなんてあんまり無けれど、それでも少年は幸せと感じ、周りの皆も幸せそうだった。

皆は口を揃えて言う

「これもあの領主様のお陰だよ」

と

「領主様はとても素晴らしい人だ」

と良く少年は両親や周りの人からも言われ

「領主様は皆を笑顔にする凄い人なんだ！」

と少年も幼いながら領主を尊敬した

だから

領主のお屋敷の窓からいつもつまらなさそうに外を眺めている少女を見て、少年が不快な感情を抱いた。

——おい、何でつまらなさそうにしてるんだ？

皆を笑顔にしてくれる領主様のお屋敷にいるのに、少女は全然笑わない

——だって、私・・・体弱くて外に出れないしお友達も居ないし・・・

それが少年には許せなかった

——じゃあ俺が友達になってやる

だから少年は少女に手を差し伸ばして

——お前、名前は？

少女はそれを手に取った

——エヴァンジェリン？長い名前だな・・・ん？エヴァでいいって？分かった——よろしくなエヴァ！

そうして物語は変わりだす。

第一話（前書き）

1 / 5 内容を修正

第一話

その日、マクダウエル邸で追いかけてこが繰り広げられていた

軽鎧をカチャカチャと鳴らしながら走る番兵の先には少年が一人

この地方では珍しい黒い髪と目を持ち質素な服に身を包んだ10歳ほどの少年だ

「待てー！ナツメエエエ！」

番兵の怒鳴り声が屋敷の庭に響く

ナツメと呼ばれた少年はその声を聞くと走る速度を緩めるところか更に上げる

軽鎧を着ているとはいえ普段から訓練を積んでいる番兵が追いつけないあたりナツメの足の速さが伺え、それを証明するかのように二人の距離はどんどん広がっていく

しかしいくらナツメの足が速かろうと相手は体力的に勝る大人

早く撒かないといずれは捕まってしまう

—— 次の曲がり角を曲がったらすぐに茂みに飛び込んで撒こう

屋敷の角を視界に入れたナツメがそう決めた時だった

「行つたぞ！オーリス！」

ナツメを追っていた番兵が声を張り上げる

「任せろジョセフ！」

ナツメが曲がろうとした屋敷の角、そこから後ろの男とは別の番兵が飛び出してきた

ナツメは一瞬だけ怯んだように身を強張らせる

しかしそれは本当に一瞬

ナツメは足を止めることなくオーリスと呼ばれた男の懷に飛び込んだ

オーリスは抜かれないように両手を目一杯まで広げて待ち構え――

「ナツメ！大人しく捕まれ！」

抱きしめるようにナツメに飛びかかった

「やなこつた！」

オーリスの腕がナツメを捕らえる寸前

ナツメは左足を畳み上半身を後ろに倒し、左太ももと尻で地面を滑る

「なっ!？」

自分の股下を潜って避けたナツメを見てオーリスが驚きの声をあげる

ナツメは速度を殺さずに流れるように立ちあがるとそのまま曲がり角を指して走る

「ナツメエエエエエ！」

ナツメが道の角を曲がる直前、ジョセフの怒声が庭に再び響いた

「あーばよー!おっさん！」

それに応えてナツメは捨て台詞を吐きながら茂みに飛び込んだ

――

あれから十数分後

ナツメは茂みの中を移動して目的地の前までたどり着いた

耳をすましてあたりに人の気配が無い事を確認し、茂みから顔だけを出してキョロキョロと辺りを伺う

完全に撒いた確信を得たナツメは、一息ついた後静かに茂みから出た

「さて、今日もお姫様を連れ出すとしますか」

あらかじめ茂みで拾った小石を手で転がしながら他よりも少しキレイに飾り付けられた窓の下までいくと、その窓目掛けて石を軽く投げる

小石は狙い通り窓に当たると小さく「カンッ」と音を立てた

程なくして「ズドドドッ!」とこちらにまで聞こえる大きい音が窓の向こうから聞こえ

「ナツメ!」

バン!

という声と共に窓が勢い良く開かれ一人の金髪の少女が顔を出した

「ようエヴァ、今日も攫いに来たぜ」

ナツメはまるで悪人のような笑顔で言い

「うん、今日も攫われに来たよ」

エヴァと呼ばれた少女はそれを聞いてお姫様のように笑った

つとそこへ――

「いたぞー！」

と声が聞こえてきた

二人が声の方に視線を向けるとジョセフが砂煙を巻き上げながら二人に向かって走ってきているところだった

それを見てエヴァを急かそうと窓へとナツメは窓に視線を戻し

「へっ？」

今まさに飛び降りようと窓の淵に足をかけるエヴァの姿を見て、ナツメは口から気の抜けた声を洩らした

「ナツメ！」

ナツメの予想通りにエヴァは窓から飛び降り、一直線にナツメに飛び込んでいった
補足し忘れたがエヴァの部屋は3階である

「うおおおおおい！？」

思わず変な声を上げながらもナツメはエヴァを抱き止める
無事に抱きとめる事が出来たのはナツメが力持ちだったからか、エヴァが軽かったからなのか

不測の事態で軽いパニックを起こしていたナツメは、思い出したか

のようにハッとして

「っておい！危ねーよ！」

胸の中に顔を埋めるエヴァに大声で文句を言った

しかしそれが聞こえないかのようにナツメの言葉を無視して

「ほら！早くしないと捕まっちゃうよ！」

エヴァはナツメの手を取って走り出した

「お嬢様ああああああああ！」

それを見たジョセフが悲鳴のような声をあげる

「ごめんなさいジョセフさん！晩御飯までには帰りますからー！」

後ろを振り返りながら笑顔でエヴァが言う

「ええい！許さんぞナツメエエエエ！」

追うのを諦めた番兵を尻目に悠々と屋敷から飛び出した二人は真っ直ぐに村へ向かった

女の子に手を引かれているのを村の皆に見られるのが恥ずかしいのか、ナツメは急に速度を上げ先ほどとは逆にエヴァの手を引くように走る

「キャッ！」

エヴァは一瞬驚いたように悲鳴をあげたが、すぐに笑顔に戻りナツメの手を強く握り締めた

今日もお姫様は無事に攫われた

第一話（後書き）

拙い文を読んで頂きありがとうございます

見ての通りエヴァがヒロインの一人になります
というかメインヒロイン扱いでいいのかな？

これを書いただけで砂糖が吐ける作者のラブ耐性値は殆どゼロです

それにしても短い短い

次はこの倍は書きたいと思います

第二話

side ナツメ

エヴァと二人で屋敷を抜け出した俺は村に着いた

「今日の任務を伝える！」

「はい！」

「元気があってよろしい！今日はミネツト婆さんの山菜取りの手伝いだ。まずは婆さんと家に行くぞ」

そう行つて歩き出す俺

ちなみに手はもういでない

別に恥ずかしかった訳じゃないぞ？手を離れた時にエヴァが出した「あっ・・・」って悲しそうな声に罪悪感も感じてない！断じてない！

「おはようエヴァちゃん。今日も可愛いね」

「おはようございます。小母様方」

村の人達が俺達、というかエヴァに話しかけてくる

「おうエヴァちゃん、これおやつに持ってきた」

そう言つてエヴァにりんごを渡すのはこの村唯一の商人兼八百屋のおっちゃん

「ん？何だナツメ？その手は」

「あれ？俺の分は？」

「はあ？ちゃんと金持つて出直してきな」

シッシ

と手で追ひ払う仕草を俺に向ける

「んだとー！一つくらいくれてもいいじゃねえかよ！ケチ！」

「誰がケチか！こっちは慈善事業でやってるんじゃないんだよ」

「エヴァにはくれたじゃないか！」

「エヴァちゃんは可愛いからな。あー・・・本当に惜しい・・・もう少し早く産まれていれば俺が嫁に欲しかった・・・」

そう言つて肩を落とすおっさん
そこへ

「何言つてるんだい。こんな美人な嫁さんが既に居るのに贅沢だねえ」

八百屋からのっそりと巨体が「ギンッ！」スラリトシタビジンノオ

ネーサンが出てきた

別に睨まれたから言い直した訳じゃないよ？特に人間じゃない四足歩行の哺乳類に例えようともしてないから全く冷汗なんてかく必要も無い

「うるせえ！このモンスター！」

ビシッ

とオネーサンに指をさして叫ぶおっさん

身長150cm(+45cm)のコガラナオネーサンにこんなことが言えるのはおっさんだけ

本当に無ぼ・・・オネーサンが可哀想だと思う

「なんだい？その口は？」

「いででで！すみませんでしたあああ！だから頭から手を離してくださいお願いします！」

うわーすげー

人って片手で持ち上げられるんだ

ちなみにこのオネーサン昔は「ギンツ！」・・・いえ昔『も』もの凄い美人だったらしい

本当か？まあ夫であるおっさんが言ってるんだから嘘じゃないと思うけど

「おじさん大丈夫かな？口から泡吹いてるように見えるけど」

オロオロと狼狽するエヴァ
いやー心が癒される

「大丈夫だろ、ほら早く婆さんの家行かないと婆さんが待ちくたび
れて干乾びるぞ」

抵抗しなくなってピクピクと痙攣しながらブラ下がつてるだけのお
っさんがホラーにしか見えない
平穏な村が殺人現場に早変わり！

共犯者と思われないうちに早く逃げよう

「ナツメ、これ持っていきな！」

20mくらい離れたからもう大丈夫と思ったら後ろから呼び止めら
れた

「ん？」

振り返るとオネーサンが俺に何かを投げ「ふぎゃー!?」それが俺の
顔に直撃したよコンチクショウ！

まさか口封じか？

なんてバカな話ではなかった。顔に1バウンドして落ちてきたのを
キヤッチするとそれは普通のりんごだった

「ありがとうー」

素直に礼を言っ て歩き出す

「ハッ！？じつちゃんとばっちゃんが俺に手を振っていた」

あ、おっさんが復活した

ちなみにおっさんの両親はご健在です

この村は今日も元気で溢れているようだ

「え？ギックリ腰？」

ベッドに寝たまま離す婆さんに聞き返す

「すまないねえ・・・朝蒔き割している時に・・・イテテテ」

「大丈夫ですか？ミネットさん」

婆さんの腰をさするエヴァ

「悪いけど今日の山菜取りは中止って事になるね」

まあギックリ腰じゃ仕方ないか

でも困ったな

実はこれ、エヴァの勉強のためでもあるんだけど・・・よし

「いや、山菜取りはエヴァと二人で行くよ」

「良いのかい？」

「大丈夫ですよ、この近くには猛獣も出ませんし」

エヴァも行くって言うてるし良いだろう

このへん田舎すぎて盗賊も出ないし

「じゃあ頼めるかい？十分に気を付けるんだよ？」

「あー違う、そのキノコは食べたら高熱が出て死ぬ」

「その草は下痢が止まらなくなつて死ぬ」

「それは腹痛で死ぬ」

「それは・・・（ry」

山について山菜取りを始めて二時間ほど
成果はというと

「なんで毒キノコ&毒草ばかり拾ってくるんじやーい！！しかも
致死性のある物ばかり！！」

こんなの持って帰ったら村が一日で全滅するわ！

「知らないよ！向こうが勝手に集まってくるの！それに毒の無い物

もあつたでしょ！」

いくつかあつたな

アブナイ商人さん御用達のお薬の原料になるキノコだけど

他にも虹色に発光するキノコとか初めて見たわ

「本当だもん・・・」

エヴァの言葉がだんだん弱くなっていく

あ、やばい

エヴァ泣かせたら村の皆にボコボコにされる

「まあ、確かに山菜取り初心者のお前にそこまでのレベルを求めた俺が悪かったよ」

そう言つてエヴァの頭を撫でる

まあ10回はやってるはずんだけどね

それでも毎回ヤバイ物ばかり拾ってくるあたりもう才能としか言いようが無い

「もう才能だとか、どうしようもないとか思つてない？」

やっぱり本人も自覚してたか・・・

なんて言つたら絶対泣くので言わないが

「思つてない思つてない。だから機嫌直してくれよ」

「じゃあ、お願い一つ聞いてくれる？」

「いいぞ」

「本当に？」

「ああ」

「何でも？」

流石にそれはちょっと・・・

ウルッ

「あー！何でもだ何でも！だから泣くな！頼むから！」

『女の涙は卑怯だ』と村の男衆が言ってたけどこの年でまさか理解するとは思わなかった

「じゃあね！10日後に私の誕生日があるから絶対にお祝いに来てね！」

「え？それでいいのか？」

思わず気が抜ける

言われなくても普通に祝ってやるつもりだったけど

「うん絶対だからね！」

まあ機嫌直してくれたから良いか

「さて、そろそろ帰るか」

作業を再開して1時間ほどたった。村に帰る着く頃には良い時間だろう

「おーい、そろそろ帰るぞー・・・てアレ？」

エヴァに声を掛けようと周りを見回すがどこにも居ない

「集中しすぎてはぐれたか」

山菜の詰まった籠を背負って歩き出す

幸いそんなに離れていなかったようで数分もしないうちに、木の陰に座り込んでいるエヴァを見つけることが出来た

「それでね、その時ナツメは・・・」

「何してるんだあいつ？」

エヴァは誰かと話しているようだが木が邪魔で分からない

「エヴァ、誰と話してるんだ？」

埒が明かないので近づきながら話しかける。大分近づいたがまだ木の陰に隠れている話相手は見えない

「え？ナツメ？」

エヴァはやけにビックリしたような声を出す

「ちょ、ちよっとそこで待って」

何をそんなに焦っているのだろうか？

取りあえずそこに立ち止まって待つ。エヴァは十秒もしないうちに木の陰から出てきた

「誰と話してたんだ？」

ヒョイと木の向こうを覗いてみても、誰もいなかった

「えーっと、その・・・」

イタズラして言い訳を探す俺ってこんな感じなんだろうな。何かを隠してるのが丸分かりだ。

「誰かって言われても・・・」

やけに歯切れが悪いな

そこで俺は正解に行き着いた

「エヴァ・・・」

「え？ちょ！？ナニナニ？？」

エヴァの肩を両手でしっかりと掴んで目を真っ直ぐ見る

心なしかエヴァの顔が赤くなってる気がするがそんなの今は関係ない

「ごめんな・・・」

「え？なに？何でそんなに慈愛に満ちた目で見つめるの？何でそんなに可哀想な子を見るような目で見るの！？別に独り言ってた訳じゃないよ」

友達が俺しかいないせいで随分寂しい思いをしたエヴァは、誰も居ない空間に話しかける可哀想な子に・・・って違うの？

「じゃあ誰と話してたんだ？」

再び唸り始めるエヴァ

「えーっと、そう兎さん」

「えー・・・」

「何で今度は冷めた目で見るの？違うの！今の嘘！」

必死な感じがまた真実味を強めている。今度から俺がしっかりと支えてやるう・・・

エヴァがもう二度と寂しい思いをさせないように・・・

「何でそんなに決意に満ち溢れた目をしているの？だからちよっと待っててばー！！」

おっと、早く帰らなきゃならないんだった

第二話（後書き）

すこし間があいてしまいました

次の話くらいから物語りは進んでいくと思います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8691p/>

ネギま！転生物 え？転生の意味が違うって？

2011年1月16日15時30分発行